

「架橋動詞」、「指定主語条件」と Gestalt 心理学

葛 西 清 戒

0：筆者は葛西（2008）において、架橋動詞と指定主語の関係の可能性があることを論じた。以下で見るように、Chomsky（1977）が「不明」だという「架橋動詞」はどんなものなのか、ということと「指定主語条件」との関係を議論しなおし、その関係はは、gestalt 心理学の figure, ground の視点からとらえられるべきである、とするのが本稿の主張である。つぎのように議論をすすめる。

[1] 「架橋動詞」と「指定主語条件」

[2] Wallace の主張

[3] まとめ

[1] 「架橋動詞」と「指定主語条件」

[1-1] 「架橋動詞」 Chomsky（1977：85）は、つぎの文、

- 1.a *What did John complain that he had to do this evening ?
- b *What did John quip that Mary wore?
- c ?What did he murmur that John saw?

から、どんな動詞が「架橋」（bridge）となり、どんな性質の動詞が「架橋」にならないのか「不明（unclear）である」という。この鍵はつぎにみる「指定主語条件」にひそんでいるようである。つぎの例を加えると架橋の動詞の性格が一層はっきりしてくるであろう。

(!d. What did you say Mary had done ...to Sue?)

[1-2] 「指定主語条件」

Chomsky (1973) では、

- 2.a The men saw the picture of each other.
b *The men saw John's picture of each other.

(2a、b) から(3)を導く。

3. Specified Subject Condition: No rule can involve X, Y in the structure..X [$\alpha \dots Z \dots WYZ \dots$] ...where Z is the specified (i.e. non-pronominal) subject of WYZ and α is a cyclic node (NP or S).

(3a、b) の主語 the men と最後の each other の関係は、その間に the picture のときには成立するが、John's picture のときには非文となる。このときの John を specified subject とよぶのである。

これに関して重要な問題がある。つぎの例をみよう。

- 4.a I gave John a picture of himself.
b ?I gave John that picture of himself.
c *I gave John Mary's picture of himself.
d **I gave John Mary's sister's picture of himself. (Grosu 1972)

(4a-d) の文で、himself は John を指すものだが、両者の間にある要素に、a>that>Mary's>Mary's sister's となる順に許容度がさがる。

ここで重要なのは、Chomsky のいう specified subject の specified は 2 者

「架橋動詞」、「指定主語条件」と Gestalt 心理学（葛西清蔵）

一のものではなく、段階的なものだ、ということである。そもそも specific は gradable な形容詞である。さらに、つぎの例をみよう。

- 5.a What did you see the picture of...?
b *What did you glimpse the picture of ...?

glimpse=see or perceive briefly (COD) とあるように glimpse は see より specific である。そうして、このときは、これを越えて要素の移動はできない。つまり「指定主語条件」の場合とおなじ現象がおこる。さらに、いくつかの例をみよう。

- 6.a She said that Bill had hit it.
a' What did she say that Bill had done?
b She purred that Fred had given her present.
b' ??What did she purr that Fred had given her?

(6a', b') をみると、許容度の低いのは動詞 purr のほうである。purr=speak in a low voice (COD) とあるように、purr は say より specific である。（ここでは、まさしく、the choice of verb clearly reflects theb acceptability of extraction' (Deane 1991: 21) である。

つまり、specific な動詞は、Chomsky の Specified Subject とおなじ機能をしていることになる。ここをこえて要素の移動はできないのである。ここではつきりいえることは Specified Subject Condition の定義にある the specified subject (i.e. non-pronominal) subject という表現は二重に不正確である、ということである。一つには specified には段階性があるということであり、二つめには、subject とあるが、これは主節動詞でもおなじ現象がおこることである。ここから(7)のように予想することができる。

7. 「架橋動詞とは、specific でない動詞」のことである。

これで、(1a, b, c) は説明できる。また、これは「非架橋動詞は、...in X manner のように、架橋動詞をふくんでいるだけ意味が重層化している」(安藤・小野 1993: 33) もこれを支持しよう。さらに、すでにみてきたところからも明らかなように specific とは「情報量が多い」といいいかえることができる。つまり、specified subject condition は、もうすこし一般化して、(8)のようにできよう。

8. 情報ゆたかな要素をこえて、べつの要素を移動させることはできないし、これをこえて、二つの要素を関係づけることはできない

(8) は、つぎの ‘the more unusual matrix verb, the less easy extraction is’ (Ertaschik-Shir and Lappin 1979: 71) 屋、‘as the verb are made less stereotypical, the acceptability of extraction drops off’ (Deane 1991: 22) を満足させるものである。

[2] Wallace の主張

[2-1] figure, ground

(8) で(1)、(2)、(4)、(5)、(6a'、b') の例文はすべて説明できる。これらのこととは全体として何を意味しているのであろうか。Lakoff (1979: 246) はのべている ‘thought, perception, the emotion, cognitive processing, motor activity and language are all organized in the same kinds o structures which I am calling gestalt’ 言語と心理学の関係の深さを示してあまりあるが、‘an organized whole’ (OED) と定義される gestalt の心理学で使われる figure, ground を Chaplin (1976) の心理学辞典で figure-grounds の項でみよう。(a) figure, which stands out, has good contour and gives the appearance of solidity or

three dimentionality; (b) the ground, which is indistinct and whose parts are not clearly shaped or patterned. とある。

figure の stand out, solidity は、まさしく(8)でみた「情報ゆたかな要素」である。当然 ground は、figure 以外の箇所ということになる。この figure, ground がまとまって an organized whole をつくるというわけである。このことを、つぎの「うそ (lie) test」これを検証しよう。Ertescik-Shir and Lappin (1970) につぎのような例がある。

9. Billsaid: She claimed he had done it.
 - a. which is a lie---She didn't
 - b. which is a lie---he hadn't
10. Bill said: She made the claim that he had done it.
 - a. which is a lie---she didn't.
 - b. ?which is a lie---he hadn't.
11. Bill said: She discussed the claim that he had done it.
 - a. which is a lie---she didn't
 - b. *which is a lie---he hadn't.

(9)、(10)、(11)でみるように、主節動詞が claim < make he claim < discuss the claim と情報量がゆたかになるにつれて、従属節の内容が段階的に否定しにくくなる。主節動詞が figure とすれば、従属節は ground となり、この figure, ground で 'an organized whole'、つまり 'gestalt' をつくることになる。文の要素の移動というのは、この an organized whole たる gestalt をみだすことのないようになるはずである。そのように考えると、今まで見た「架橋動詞」「指定主語条件」、「うそテスト」の例はすべて説明がつく。

[2-2] Wallace (1982)

Wallace (1982) は ‘figure and ground’ という題の論文の中で、この figure, ground の考えが「言語範疇の意味をあきらかにするのに役立つ」と強調しつつ、Krech et al.(1974 : 264) を引用する。‘the part (figure) stands out distinctively from the rest’. これこそまさにさきにわれわれがみたものである。figure こそ他の部分から ‘stand out’ するのである。そのあとで、salient ということばを使い、stand out する部分をあげるが、この salient こそ、情報ゆたかな、specific な部分であるはずである。

[3] まとめ

一見まったく関連のないと思われる「架橋動詞」、「指定主語条件」はたがいに深い関係にある。いずれも、情ゆたかな、別に言えば specific な箇所をめぐる一つの側面をなす。言語表現は、情報ゆたかな figure の部分と、そうでない ground からなる、an organized whole たる ‘gestalt’ である。figure をこえて複数の要素を関係づけたり、移動させたりすることはほかならぬこの gestalt を organized でないものにしてしまう。つまり、その言語表現はなにを表現しようとしているのか混乱させてしまう、ということになる。たとえば、

- 12.a That Mr. Smith sent us this report is obvious.
 b *This report which that Mr. Smith sent us is obvious is going to be transferred to the PTA.

の (12b) などに見る「文主語制約」など典型的な例であろう。ここでは figure と ground がみだれ、もはや organize された gestalt ちはいいがたい。すでに提案された「島」、その後提案された「制約」、「条件」はこのような視点で見たときにはじめて正当な位置付けをえることになると思われる。

参考文献

- Chaolin, J. P. 1976 Dictionary of Psychology A Laurel Orginal
- Chomsky, N 1973 ‘Conditions on transformations’ Anderson, S. and P. Kiparsky (rds.) A Festschrift for Morris Halle Holt, Rinehart and Winston
- Chomsky, N. 1977 ‘On WH-movement’ Culicover, P>W. et al. (eds.) Formal Syntax Academi Press
- Deane, P. D. 1991 ‘Limits to attention: a cognitive theory of islands phenomena’ Cognitive Linguistics 2: 101-111
- Erteschik-Shir, N. 1977 On the nature of island constraints Ph. diss. INdiana Univ. Linguistics Club
- Erteschik-Shir, N. and S. Lappin 1970 ‘Dominance and extraction a reply toa AGrosu’ Theoretical Linguistics 10: 81-96
- Grosu, A. 1972 The Strategic Content of ISlad Constraints Working Papers in Linguistics, Ohio State Univ.
- 葛西清蔵 2008 「架橋動詞」と「指定主語条件」『札幌大学総合論叢』25：141-149
- Krech, D. R. S. Crutchfield, and N. Livson 1974 Elements of Psychology A. D. Knopf.
- Lakoff, R. 1979 ‘Linguistic gestalt’ CLS 13: 269-287
- Wallace, S. 1982 ‘Figure and ground: the interrelationship of linguistic categories’ Hooper, P. G. (ed.) Tense-Aspect 201-223 Benjamin Pub. Comp.